

埼玉県納税貯蓄組合総連合会優秀賞

春との邂逅

学校法人開智学園 開智未来中学校

三年

江原 深

車窓から見た空は薄曇りだった。田んぼ越しの山は、昨日に増してのつぺりとしていた。風は低く吹いている。木々は気怠そうに揺れていた。もう、ハナミズキは散り際だった。

花粉症に悩まされていた。小学三年生の頃である。

滝のように流れ出る鼻水を前に、僕は箱ティッシュの奴隷と化した。寝室の静寂は、五分おきに響く鼻をかむ音によって破られた。当時一緒に寝ていた兄妹たちは「地獄だった」と振り返っている。見かねた母は僕の手を引いて花粉症患者のメッカ、耳鼻科クリニックへと向かった。待合室には数々の同胞たちが集結しており、涙が惨んだが、それは花粉のせいであつた。

医者は舌下免疫療法を勧めた。アレルギー物質を少量ずつ摂取することで、体を慣らしていく治療法だ。毎月数千円かかる治療が、助成金のおかげで無料で受けられるらしい。僕は薬を飲みはじめた。

それから花粉症はぴたりと治った。洪水の如く流れていた鼻水は、小川のように穏やかになり、毎晩の安眠も手に入った。アレルギーによる体の不調もなりを潜め、心身共に健康的だ。春という季節を心の底から憎んでいたが、その年、初めて桜がきれいだと思えた。兄妹との和解も成立した。

こんなにも素晴らしい日々が送れようとは。毎月の通院と、毎日の内服だけで僕の生活は激変した。目に映るもの、耳にする音、全てが美しい。生の喜び。人生が楽しい。大げさだとも思いかもしれないが、それほど僕の花粉症はひどく、また、その苦しみから解き放たれた喜びも大きかったのである。

それから六年が過ぎた。舌下療法は、継続が大事な治療だ。今日も僕は薬を飲み、そして日々を謳歌している。ふと思う。この喜ばしい毎日は、どうして手に入ったのか。家族の助け。医学の発達。助成金制度。様々な助けがあつて、僕は生活している。いつの間にか、涙が流れていた。今度は花粉のせいではなかった。

医療費助成制度は、医療費の自己負担額を国が助成してくれるシステムだ。この制度のおかげで、僕の治療に伴う経済的負担は格段に和らいだ。助成金には、税金として納められたお金が使われている。僕は、見ず知らずの人が納めた税金に助けられてきたのだ。税金は、助け合いのシステム。そう思った。

税金は、僕を誰かを繋いでくれる。二人を「助け合い」で結んでくれる。一見無機質で機械的だけど、そこには確かに、温みと重みがある。税金を通して助け合いたい。社会に貢献したい。それが僕の夢だ。

学校帰りにクリニックに立ち寄る。薬局を出ると夕暮れ時だった。桜はどうに散っていて、新芽が夕日に輝いていた。西の空は茜色をしていた。明日は晴れると思った。